

東北地方太平洋沿岸地域  
重要自然マップ 2015  
(重点エリア拡大図)

平成 28 (2016) 年 3 月





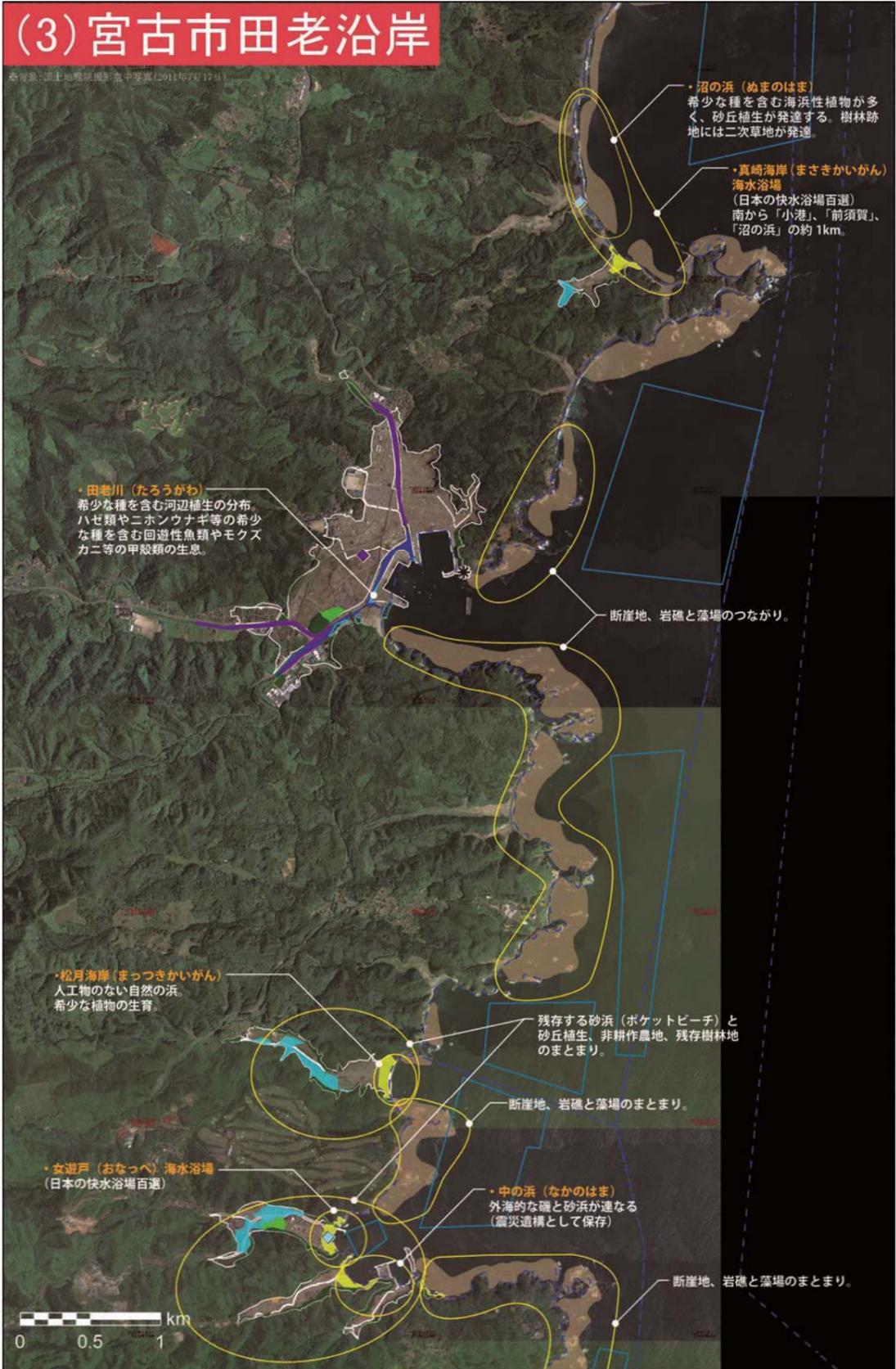




### 3 宮古市田老沿岸



### (3) 宮古市田老沿岸

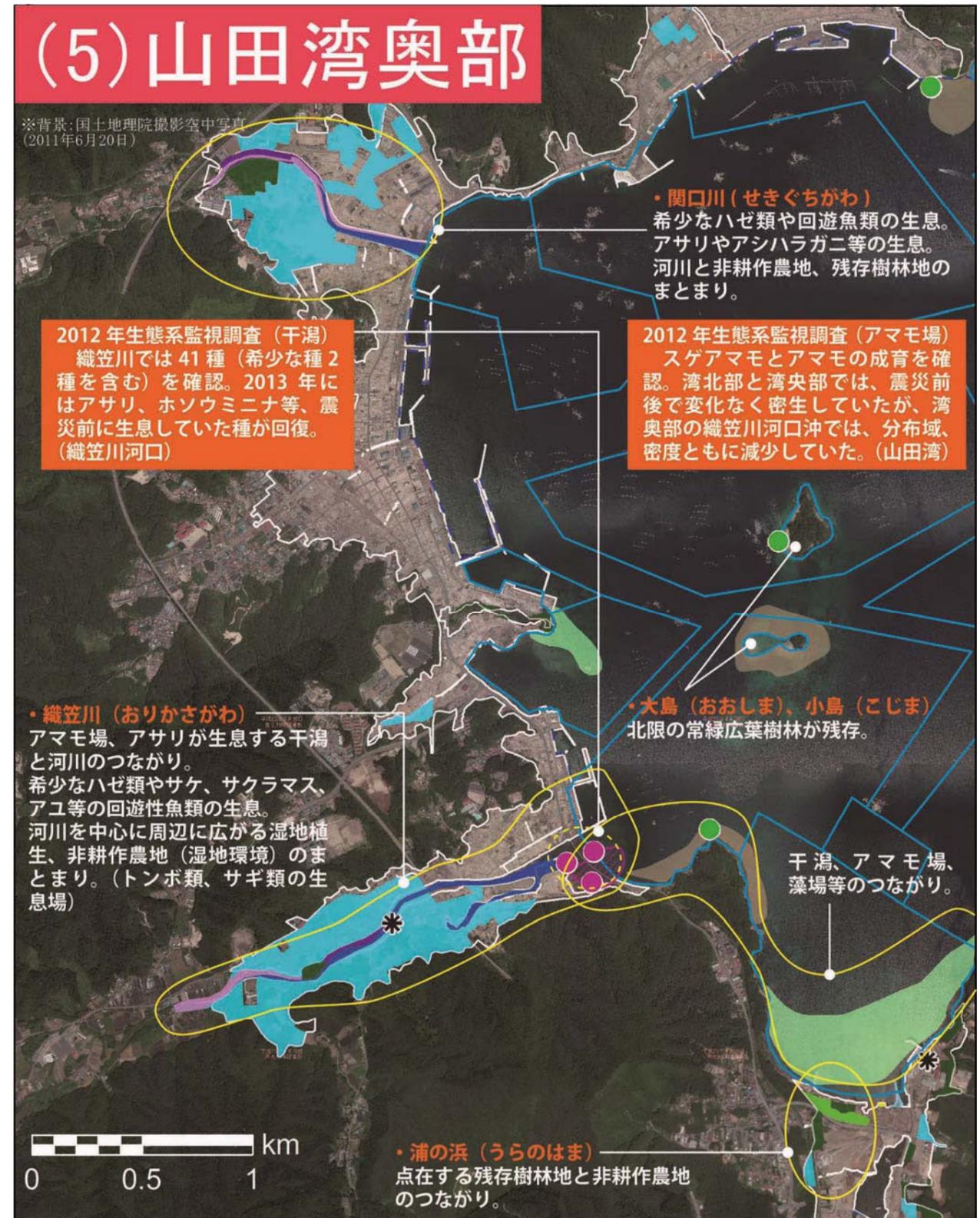


4 宮古湾



(4) 宮古湾







# 7 大槌湾奥部

## ミズアオイと ビオトープ再生の取組

鵜住居川河口域の左岸では、岩手県立大学と市民団体、地域住民が共同でミズアオイ保全の取組を実施している。重機で攪乱した土から発芽した埋土種子を保存し、ビオトープで保全している。

## 鵜住居川河口

海浜性の生物や砂丘植物の回復が目される。ハマボウフウ(学識者の指導に基づき県内産のもののみを選定)の増殖など地元ノガイ等の希少な干潟の生物もみられたが、震災後の復旧工事に伴う埋立てにより、生息地が消失した。

## 大槌町のイトヨ保全活動

このエリアより上流にあたる大槌川と小槌川の湿地・湧水池は、遡河型と淡水型のイトヨが同所的に繁殖する稀有な繁殖地で、岐阜経済大学や地域のボランティアらが保全活動を行っている。埋立てにあたっては、岩手県によって代替地への移動が実施された。



2015年砂丘植物は確認できなかった。

長く延びた特徴ある砂嘴地形は消失した。

防潮堤の改修工事の際、ハマボウフウの保全対策が実施された。もとのクロマツ林を利用した防潮林再生が計画されている。

## 生態系監視調査(干潟)

2014年時点で、防波堤の工事等により潟湖にあった干潟は多くが消失した。2015年調査では、残存する河口干潟でイトメ、イソシジミといったこの地域に特徴的な底生動物がみられたものの、震災前と比べ種の多様性は低下していた。

## モニタリングサイト1000 (アマモ場)

2014年時点でのタチアマモ・アマモの被度はともに低く植生回復は認められなかった。



"Includes material (c) (2014) BlackBridge AG. All rights reserved."

# (7) 大槌湾奥部

※背景:国土地理院撮影空中写真(2011年5月19日、2011年6月20日)

**2012年生態系監視調査(干潟)**  
鵜住居川では28種(希少な種1種を含む)を確認。環境は調査場所を大きく変えざるを得ない程度変化したが、新しい環境で底生動物相の回復傾向を確認。(鵜住居川)

## 鵜住居川(うのすまいかわ)

河口部は大きく変化した。鵜住居川は上流にダムのない河川であり、河川の連続性が保たれている。(二ホンウナギ等回遊性魚類の生息)新しい河口部のやや上流にはヨシ原が発達しつつある。周囲の泥干潟にはヤマトシジミが比較的多い。河川を中心に周辺に広がる湿地植生、非耕作農地等、湿性環境のつながり。



非耕作農地のまとまり。(トンボ類、シギ・チドリ類の利用)



周辺には以下の注目すべき場がある。

北側にある大槌川、小槌川にはサケ、サクラマス、イトヨ(淡水)が生息。海域にはアマモが生育する。

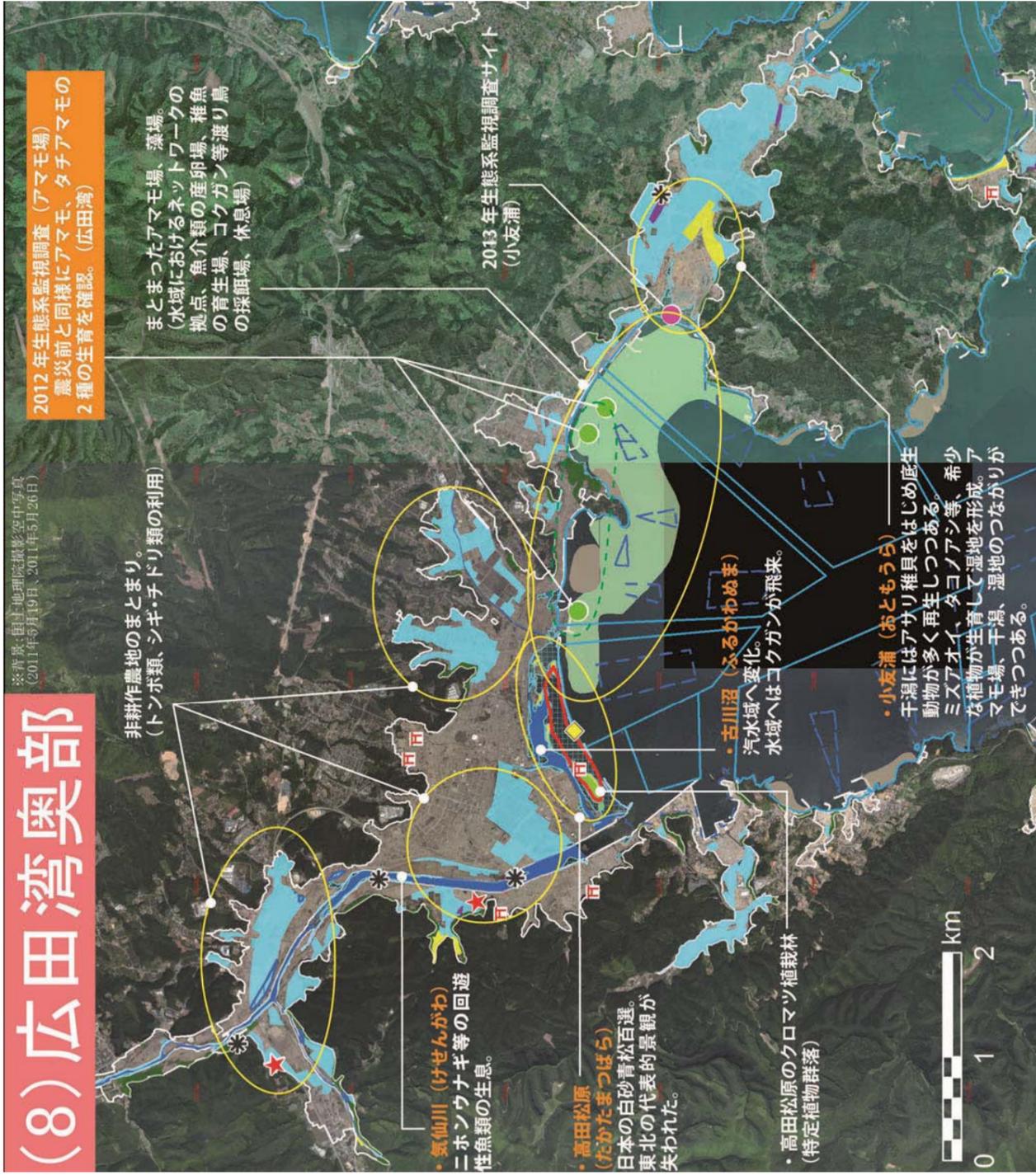
残存するまとまった砂浜。(砂丘植生、砂浜性昆虫類の生息の場)

河口の北側に残った砂浜海岸。(砂浜性昆虫類の生息の場)

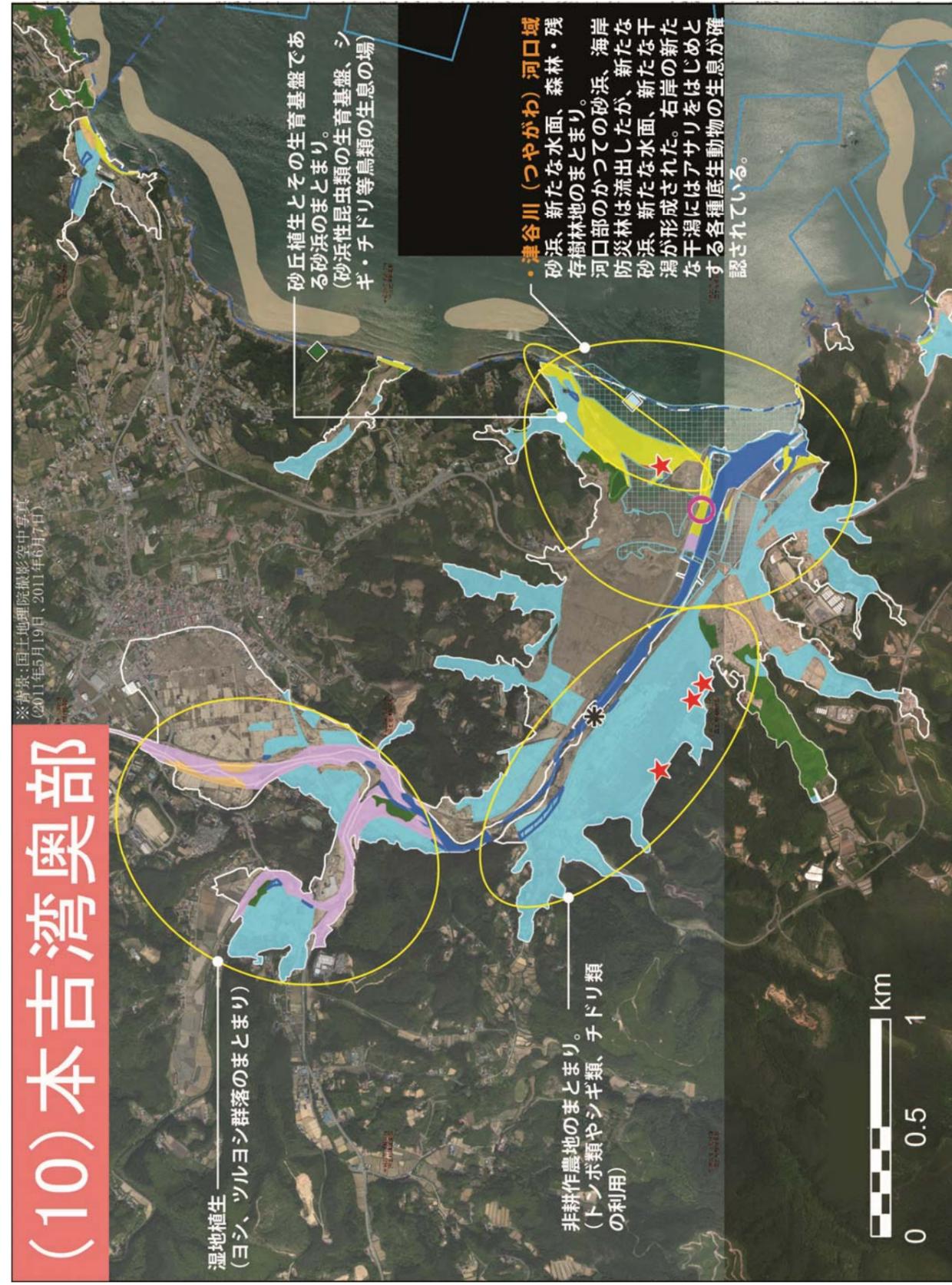
・根浜海岸(ねはまかいがわ) 長く延びた特徴ある砂嘴地形は消失。

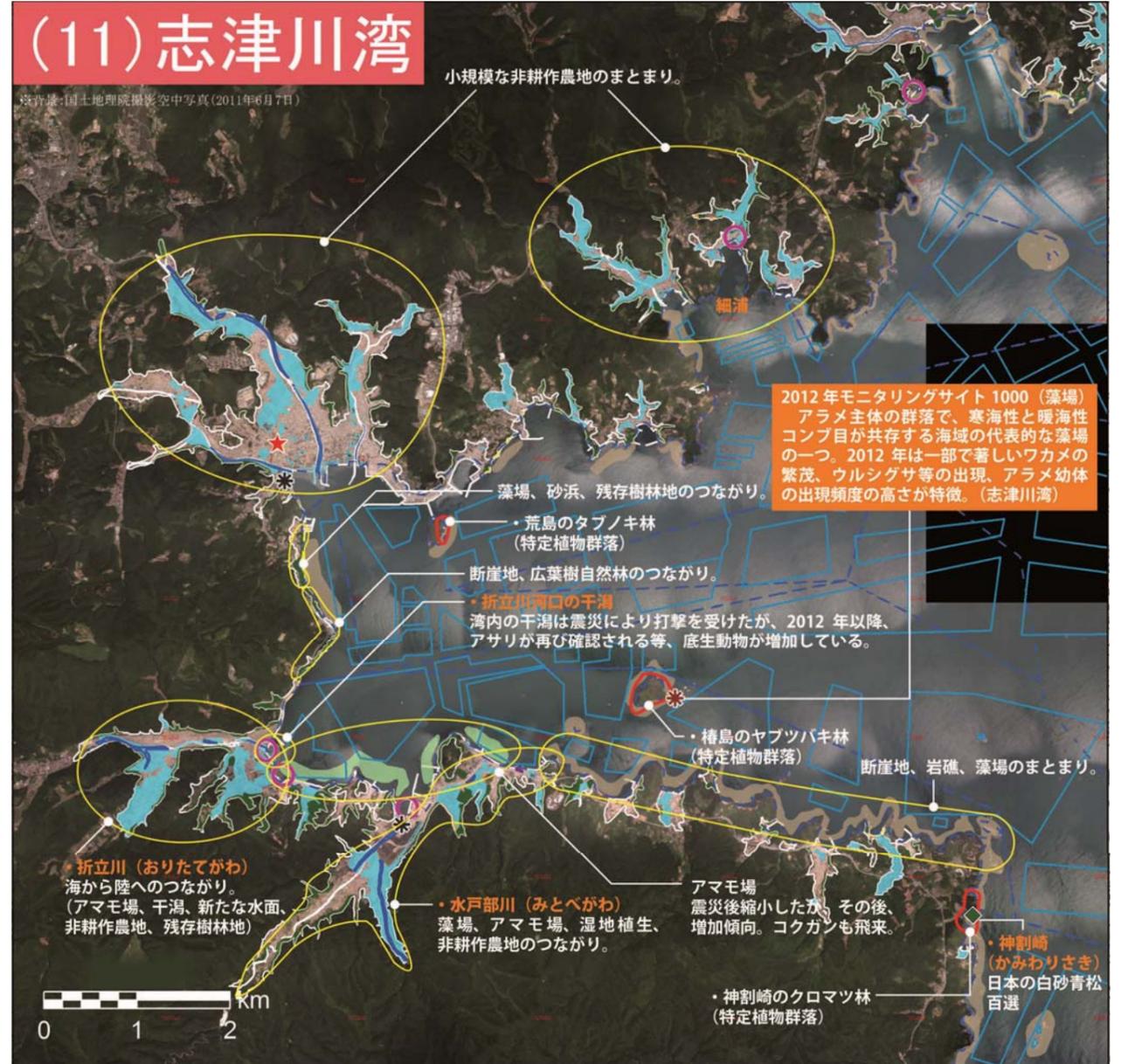
被災した海岸防災林と非耕作農地のまとまり。

2012年モニタリングサイト1000(アマモ場)震災前に確認されていたアマモ植生はほとんどが消失。一部実生などが確認されたが、著しい植生の回復はみられなかった。(根浜)

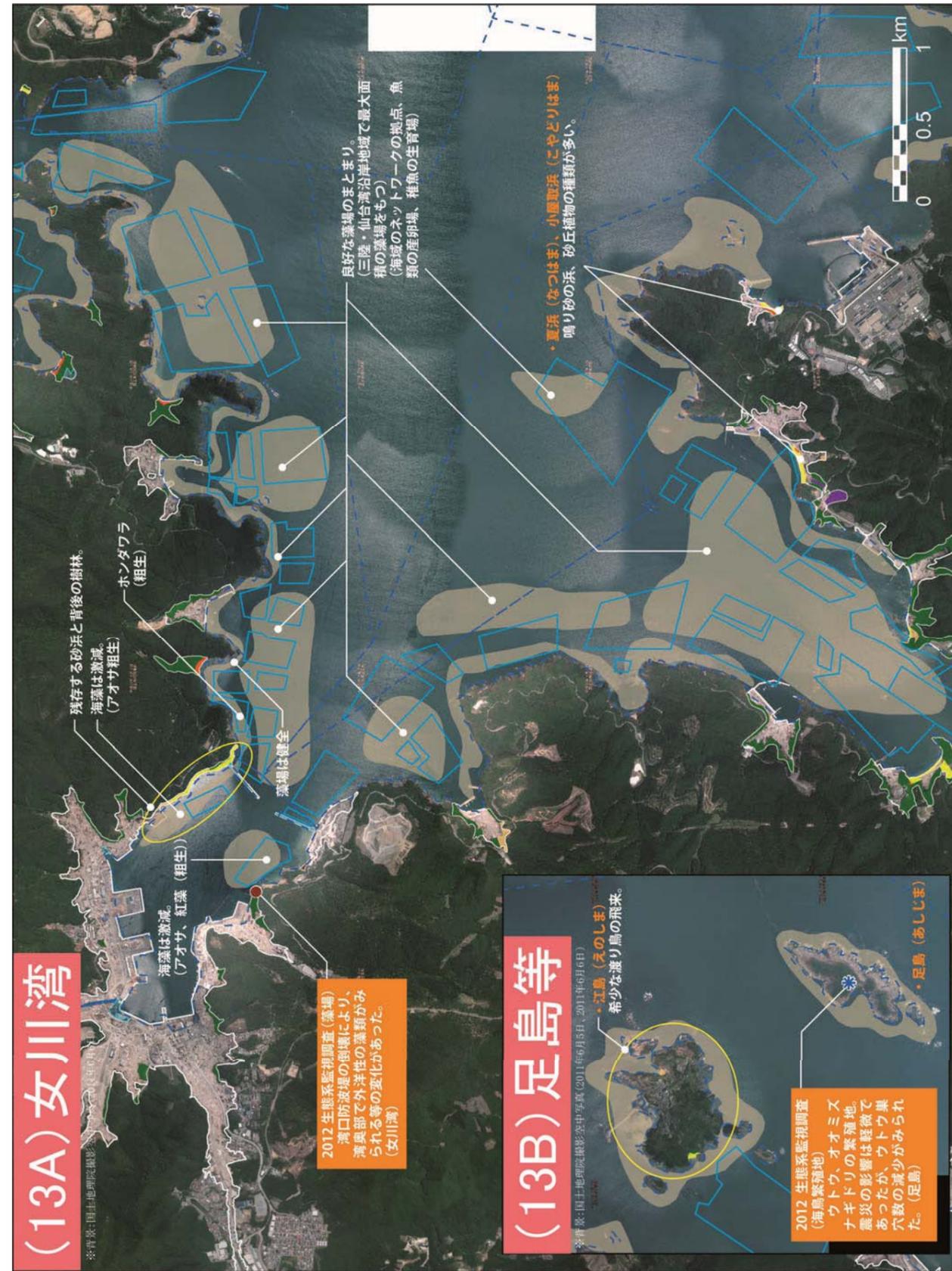








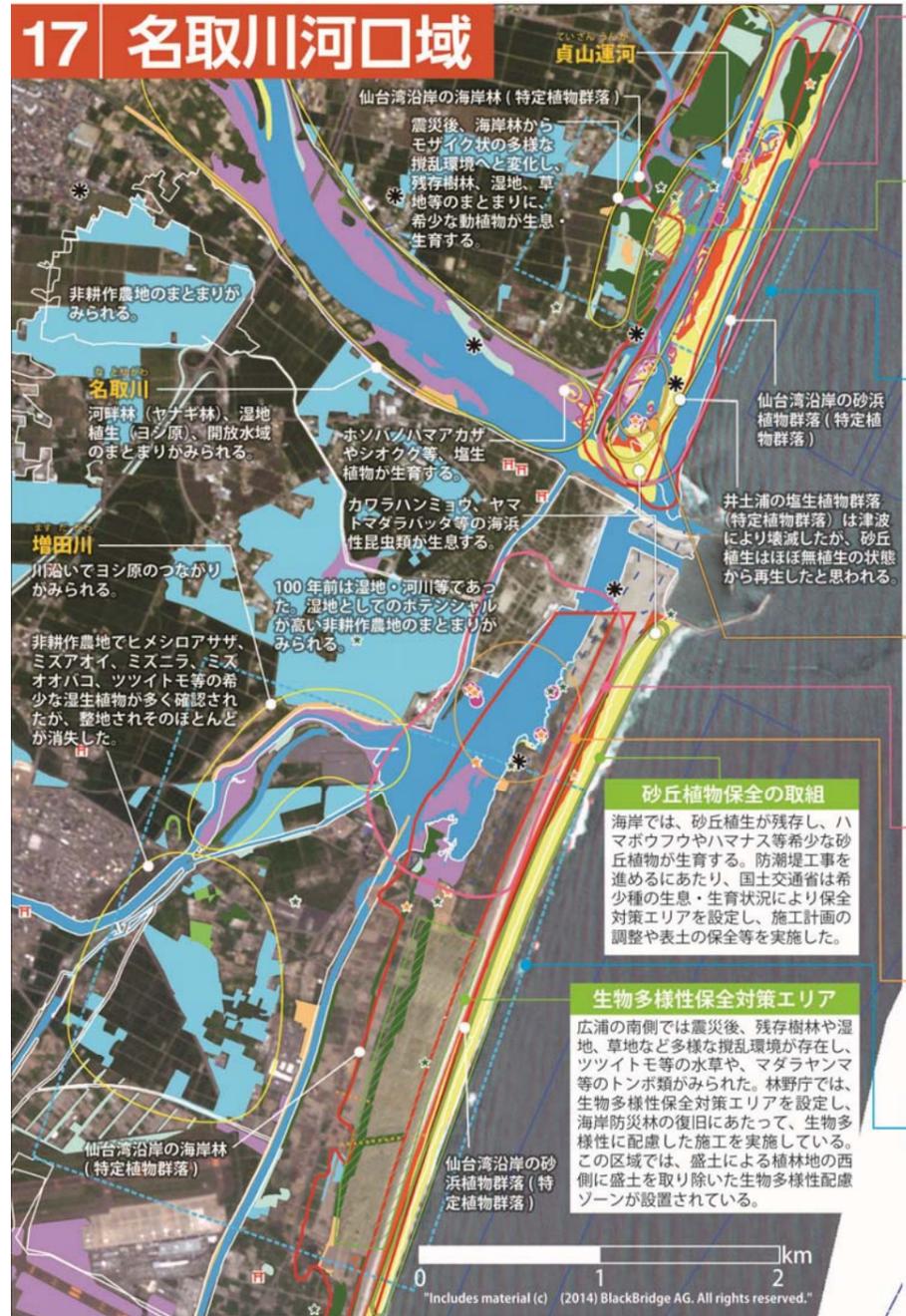












**井土浦**  
砂浜や干潟、湿地、残存樹林、非耕作農地等の多様な自然のまとまりがみられる。震災前は、貞山運河に架かる橋が近くにないため人の出入りが少なく、原生的な海岸風景を残す貴重な場所であった。震災後、潟湖状態に戻ったが、2016年現在は、名取川への開口部に砂が堆積し閉塞している。

**仙台市井戸東谷地の保全計画**  
東谷地のヨシ原は津波で消失し、干潟に変化した。貞山運河の堤防が破壊された箇所から海水が入り込んでおり、シギ・チドリ類や底生動物もみられることから、井土浦と井土東谷地を一体の干潟生態系として保全することが学識者等から望まれている。これを受け、宮城県では貞山運河の護岸復旧に際し、井土浦と東谷地が通水可能な構造を採用する干潟環境の保全を計画している。

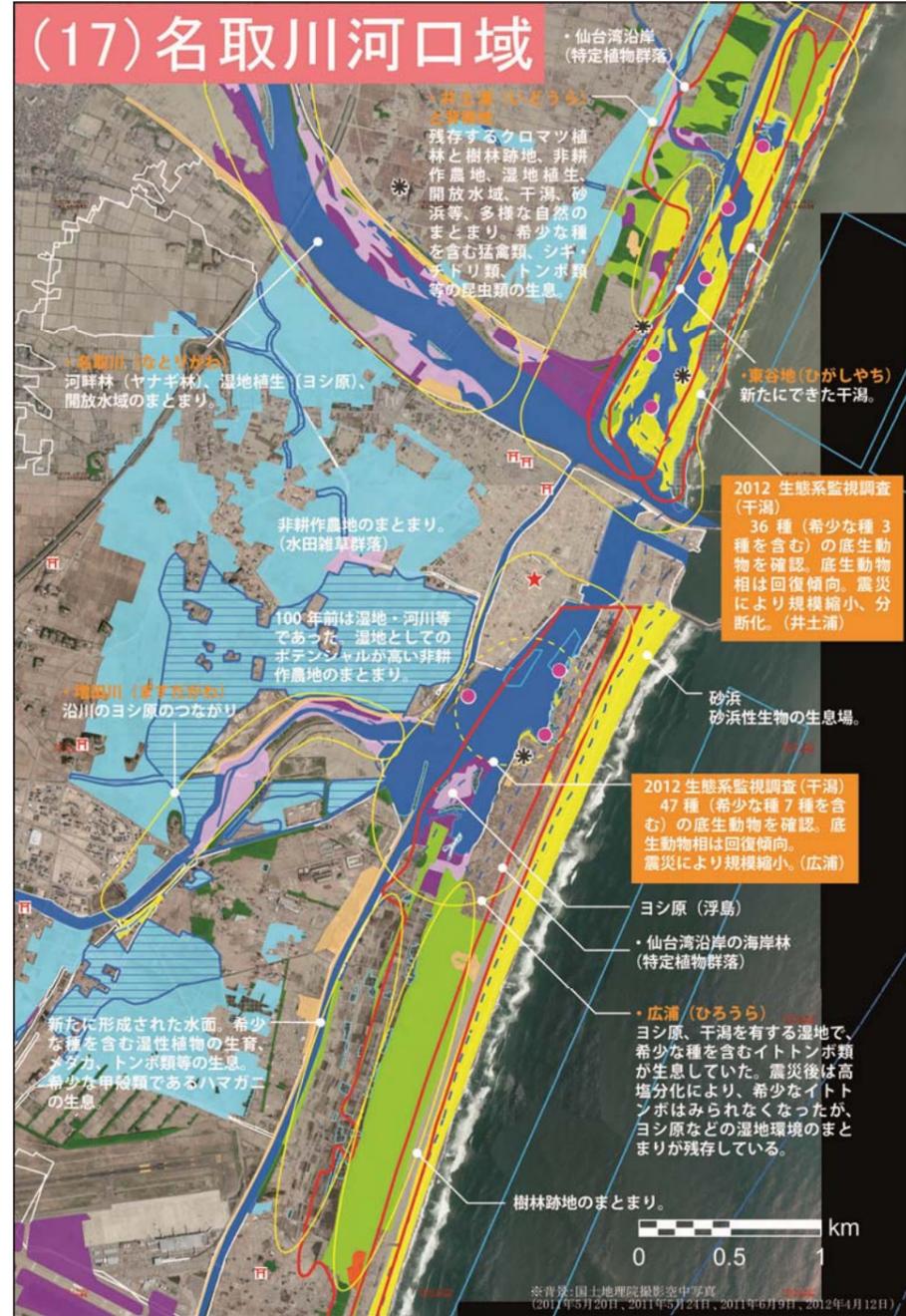
**重点地区調査 (井土浦)**  
海岸側は、2012年は裸地の面積が多かったが、2013年はホソバノハマアカガサ、シオクグ、砂丘植生が繁茂した。2014年から2015年度調査では塩生植物が衰退・消失する一方で、ヨシの繁茂を確認した。内陸側では、小バッチの植物群落から、単一のササ群落、ススキ群落、セイタカアワダチソウ群落、ニセアカシア群落への変化が確認された。[植物] センダイハギ、オオクグ、[鳥類] ミサゴ、[昆虫類] ヤマトマダラバッタ、カワランシヨウ、[その他無脊椎動物] ヤマトシジミ、アリアケモドキ等の希少な動植物が確認された。

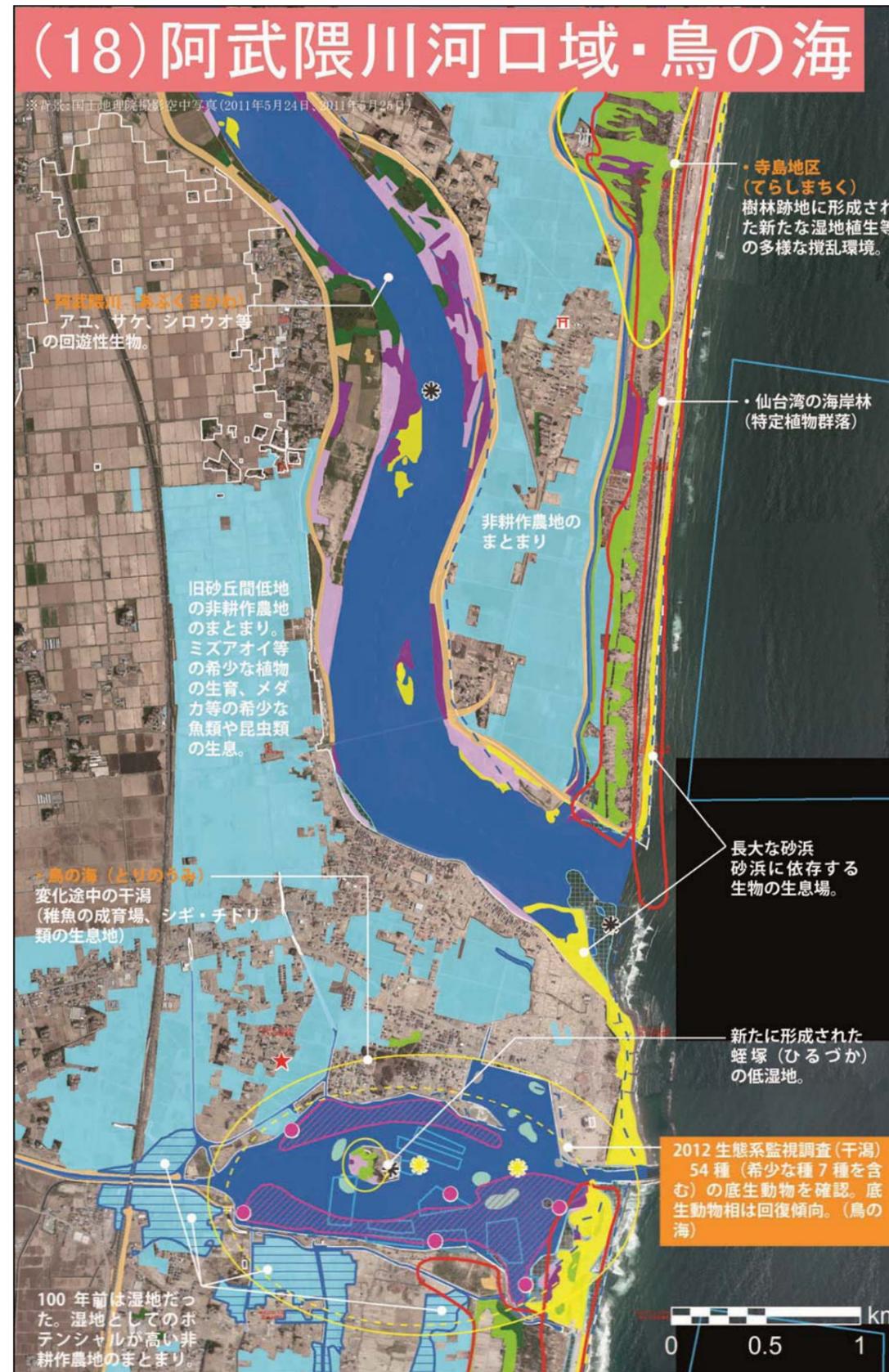
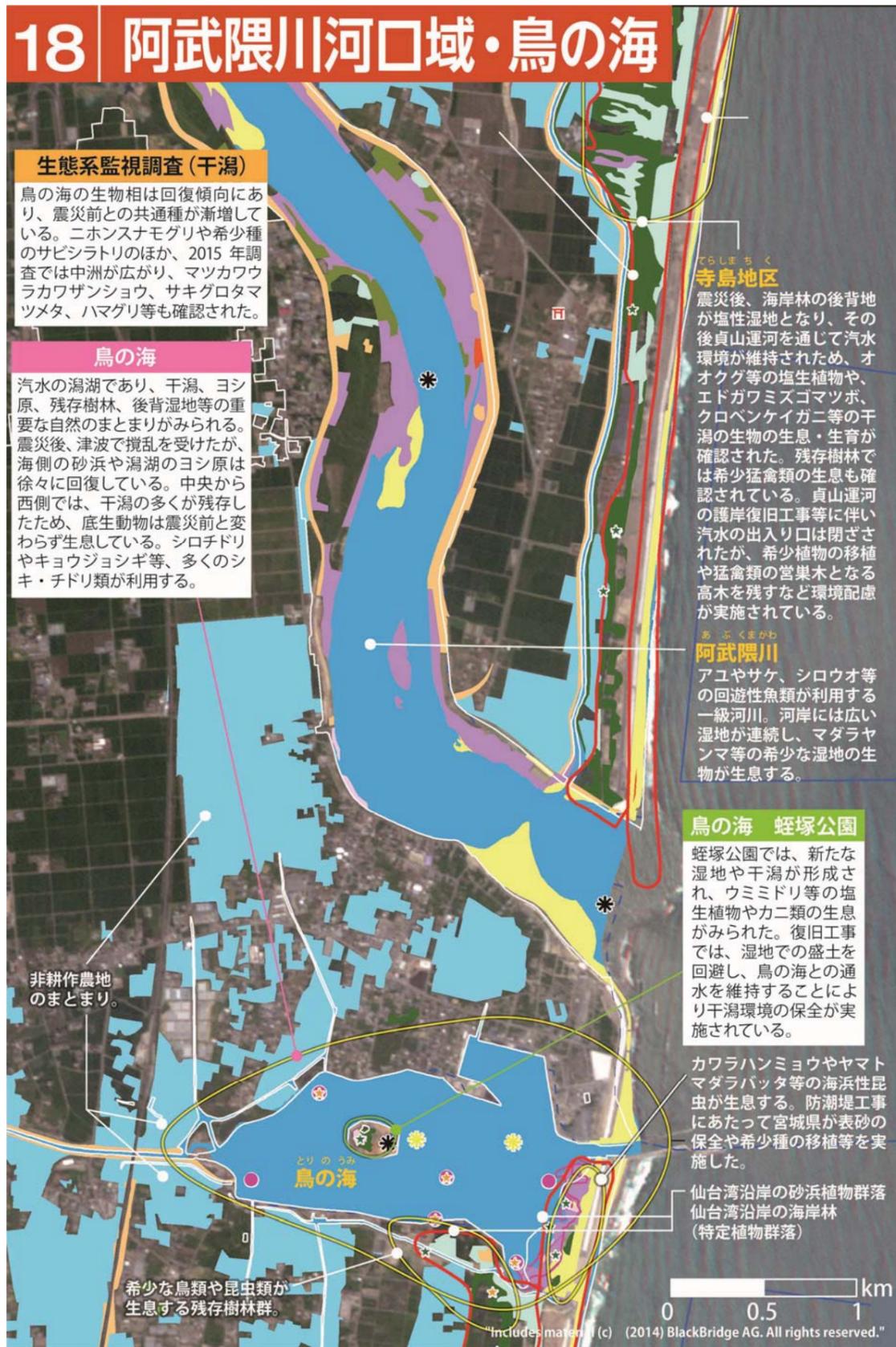
**生態系監視調査 (干潟)**  
井土浦では、震災後干潟の生物の生息種数は減少したが、その後増加傾向にある。2014年調査では、希少種としてヨシダカワサンショウ、オオノガイ、アカテガニなどが確認されている。フトヘナタリは井土浦では確認されず、井土浦から津波で流されてきたと思われる個体が井土東谷地で発見された。2015年調査でも環境は変化せず、希少種を含む多様な種がみられた。

**広浦**  
ヨシ原、干潟を有する湿地で、希少な種を含むイトトンボ類が生息していた。津波により東側の干潟とヨシ原はほとんどが消失したが、西側の砂質の干潟は多くが残存し、ヨシ原も小面積でみられる。中洲では泥底は流出し、津波後は砂質となったが、最近では干出面積が増大傾向にある。

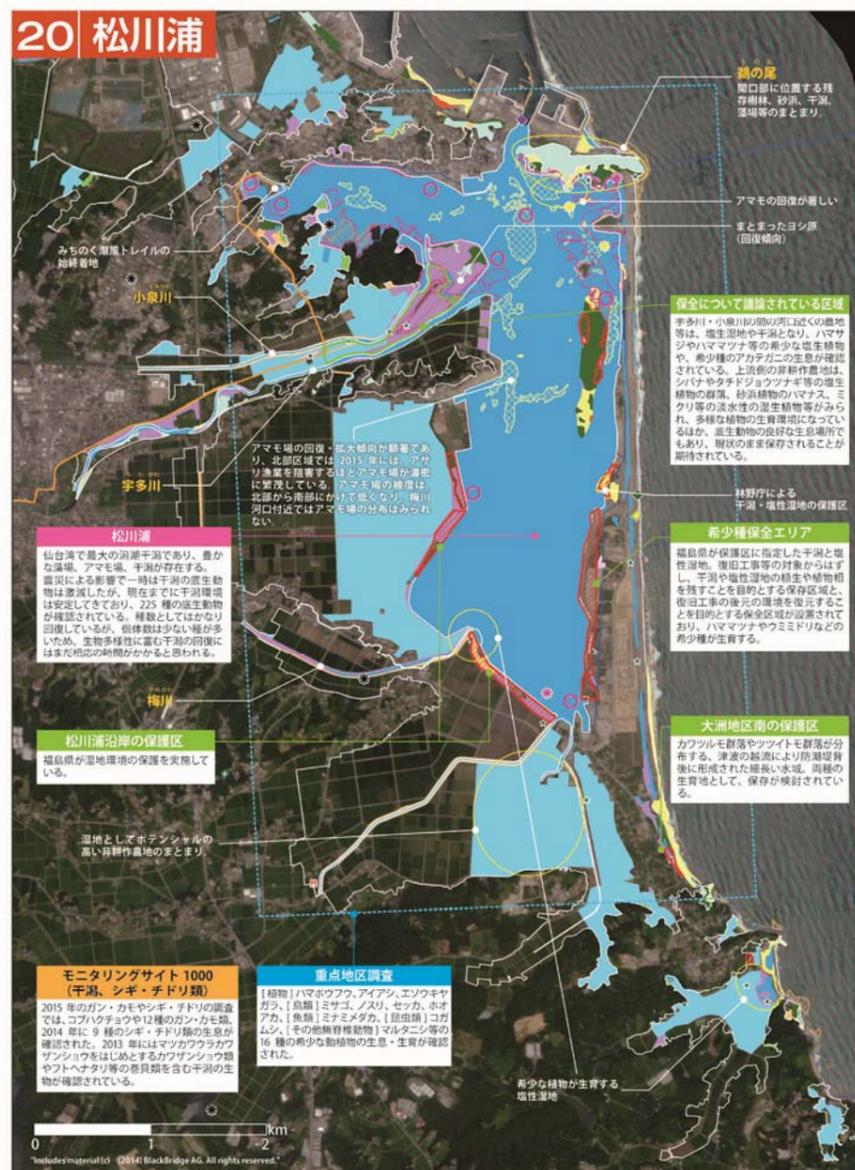
**生態系監視調査 (干潟)**  
2014年調査では、希少種としてヒナタムシヤドリカワザンショウ等のカワザンショウ類、サビシラトリ、アリアケモドキ等が確認された。2015年調査でも環境は変化せず、希少種を含む生物相は維持されている。

**重点地区調査 (広浦)**  
防潮堤の海側と内陸側に砂丘植生がわかれており、海側では本来の砂丘植生が、内陸側ではメマツヨイグサ等、荒地に見られる多年生草本を含む砂丘植生が分布していた。非耕作農地は造成後、ビニールハウス群となり、植林跡地は大部分が盛土され、新たな植林地となった。[植物] アイアシ、[鳥類] シロチドリ、[昆虫類] マダラヤンマ、ヤマトマダラバッタ、[その他無脊椎動物] アリアケモドキ等の希少な動植物が確認された。

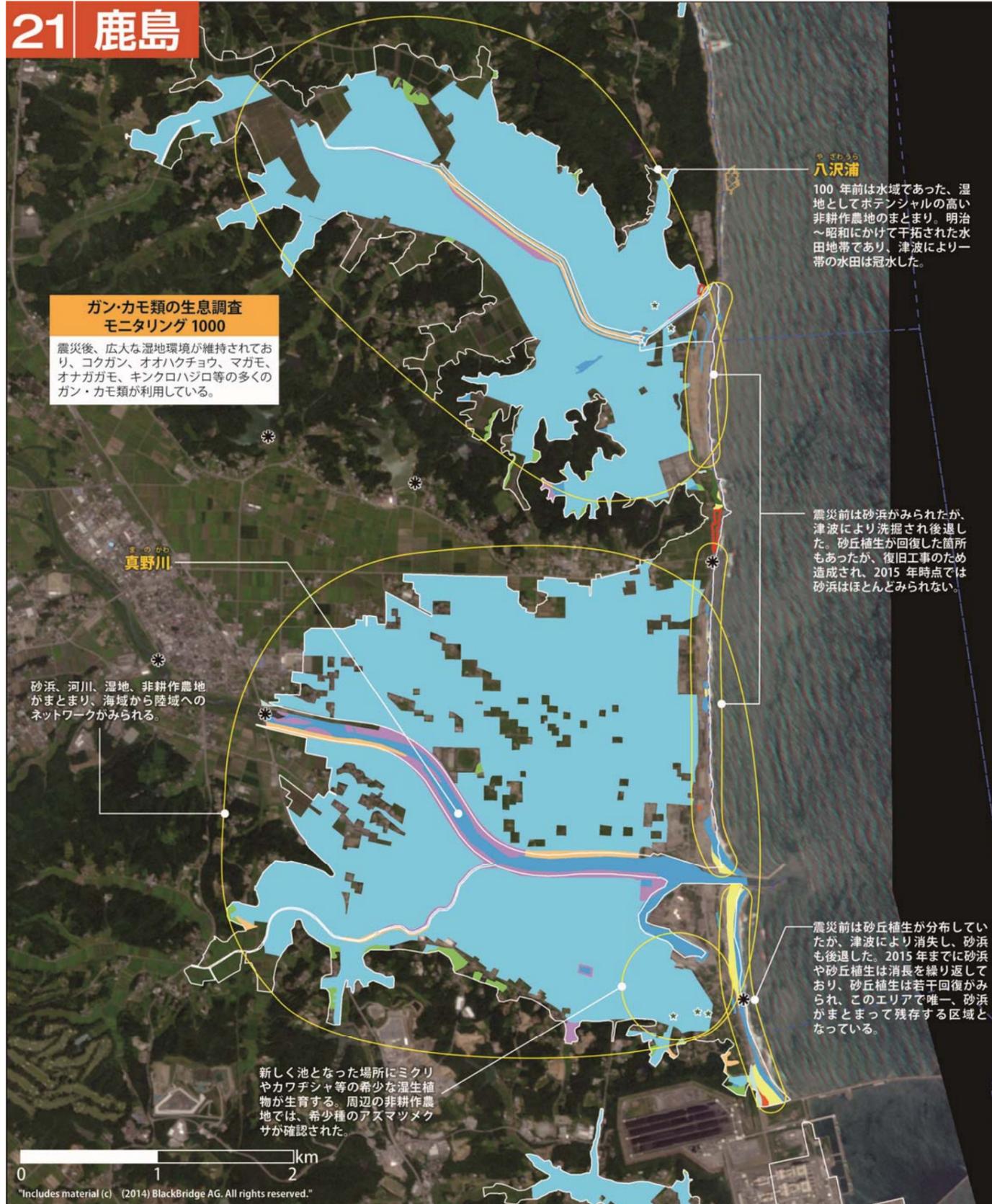




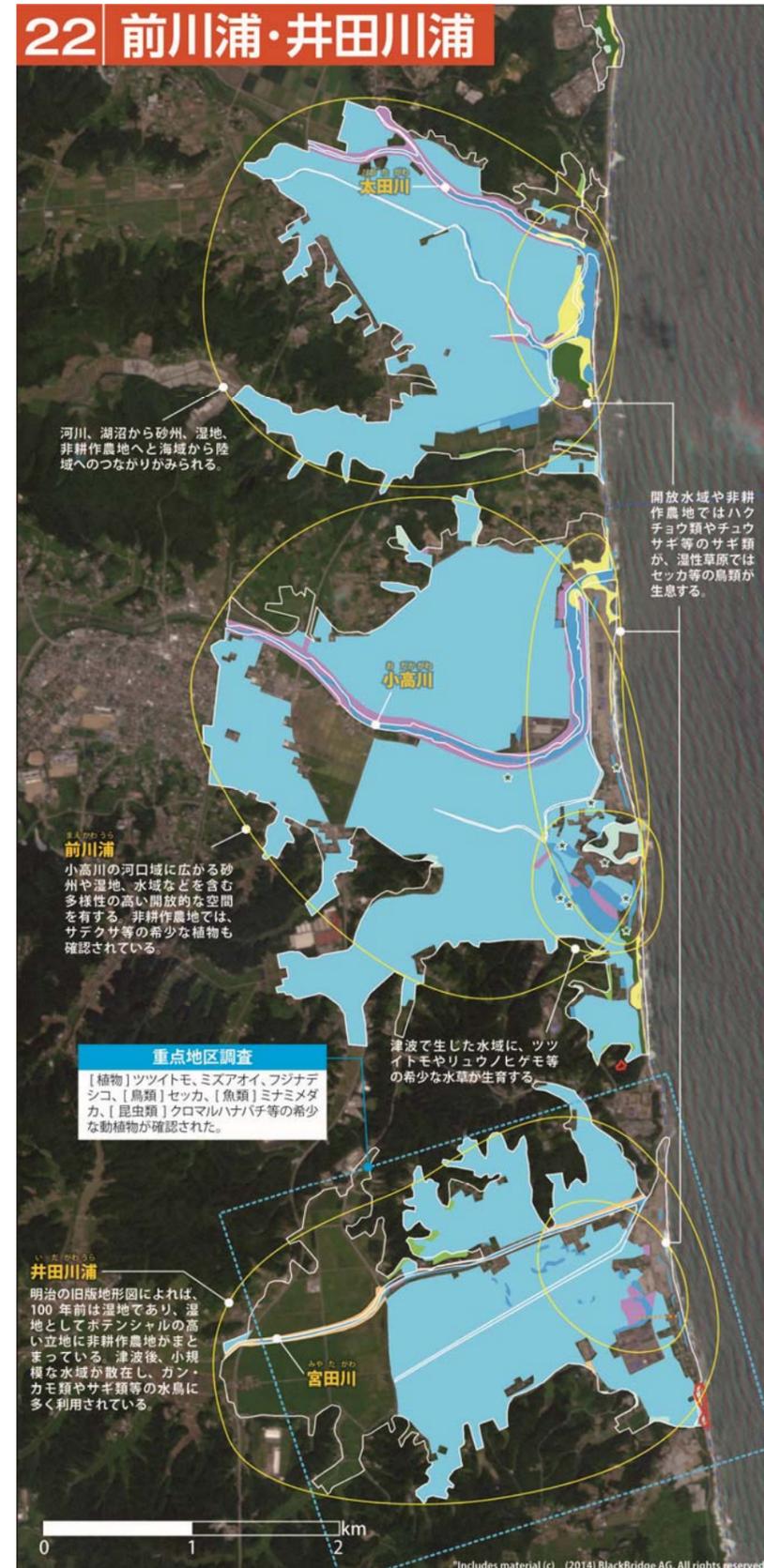




## 21 鹿島



## 22 前川浦・井田川浦



## 23 請戸川・熊川河口域



## 24 夏井川河口域



## 25 鮫川河口域・五浦

